

A Window Open to the World

2025.3

第16号

椋山女学園大学国際交流センター報

多文化共生の時代を迎えて

学長補佐・現代マネジメント学部教授 黒田 達朗

日本人の年齢構成は「ピラミッド型」から「棺桶型」に移行していると言われるように、平均寿命は伸びているものの、出生数の低下が続き、このままでは各分野の労働力の枯渇が容易に予想される事態となっています。したがって、他の先進国と同様に、いよいよ海外の労働力に門戸を開かなければ、実質的な生活水準を維持できない時期に入っています。

グローバル化の進展が指摘されて久しいですが、我が国は島国という地理的特性もあり、基本的には海外の人々への門戸を閉ざしている稀有な先進国です。これまでも労働力の減少に対応して、日系ブラジル人の受入れや、「途上国への技術移転」を建前にして期限付きでの入国を認める技能実習制度などにより、迂回路のような対応に終始してきましたが、いよいよ期限付きとは言え、高度専門職など正規の労働力としての受け入れが本格化しつつあります。

ただし、文化や言語の違いを超えた「共生」が容易でないのは、米国の人種差別や、外国人労働者の排斥を主張する欧州の政党の伸長などを見れば明かです。わが国でもコリアンタウンと言われた東京の新大久保において、ベトナム、ネパール、インドネシア等から来た人たちが増加したため、地元の商店街を中心に多文化共生のコミュニティ造りも熱心に行われていますが、必ずしも成功しているわけではありません。日本の製造業の中心である愛知県でも、多くの日系ブラジル人を受け入れた豊田市の保見団地で1990年代に大規模な対立が発生したことがあります。その後は住民の努力で落ち着きましたが、異文化の理解のためには、海外から訪日した人々との交流はもちろん、日本人自らが海外を知ることが重要です。特に、日本を基準に外国の文化や社会的制度を見るのではなく、日本も含めて世界各地を相対的な視点で理解することが肝要と思われます。

椋山女学園大学では、多くの海外留学・研修プログラムが提供されています。コロナ禍の影響も大きく参加者数もまだ以前の水準まで戻っていませんが、学生時代は人生の中でも時間的な自由度が高い時期でもあります。単なる観光旅行と異なり、海外の大学等の教育制度や雰囲気を知ることが可能である点は、大学の交換留学・研修プログラムの大きな利点です。

2024年末には、名古屋市の人口233万人の中、外国人の人口も10万人を超えました。現在、学生世代の日本人は「多文化共生」の時代を生き抜く準備が必須という認識が必要でしょう。



2024年度の受入交換留学生の活動を紹介します。

受入交換留学生

2024年度、本学では前期に14名、後期に8名の交換留学生を受け入れました。（国ごとの人数は表のとおり）半年から1年の間、交換留学生は共に勉強し、協力しながら本学での留学をより一層有意義なものにしました。

【前期】

アメリカ	1名	中国	1名
台湾	3名	韓国	8名
タイ	1名		

【後期】

台湾	1名	韓国	7名
----	----	----	----



授業

受入交換留学生向けの国際交流科目は、日本語が初級レベルの学生も受け入れられるよう、2024年度から「日本語」の科目にElementaryのレベルを設けました。また、日本語以外でも日本の文化や社会等について学ぶ「日本事情」の科目も新設しました。日本語力のある交換留学生は国際交流科目以外にも、自らの専攻に関連した学部科目を履修しています。



学外研修

前期に犬山、後期に伊勢・鳥羽で学外研修を実施しました。犬山の研修では、国宝の犬山城を見学した後、初夏の古い街並みを歩き、歴史を学びながら城下町の情緒を味わいました。伊勢・鳥羽の研修では、伊勢・鳥羽の散策や鳥羽湾クルーズ、門松作り体験を通して日本の自然や文化風情を肌で感じました。



大学外での交流

交換留学生は大学の外でも多くの人と交流しました。本学附属のこども園では元気いっぱいの子どもたちと触れ合いました。また、本学園の中学生・高校生とも交流し、お互いの国の学校生活や言葉、音楽等について語りました。ホームビジット・ステイでは、交換留学生はホストファミリー宅で1日を過ごして日本の家庭を体験し、パーティーに参加したり、鵜飼を見学したりしました。



2024年度の主な出来事をご紹介します。

総勢30名のサマープログラム

2024年のサマープログラムには、タイから8名、アメリカから2名、台湾から20名の留学生が参加し、過去最多の総勢30名の国際色豊かな交流となりました。2週間のプログラムで、留学生は初級の日本語や日本の文化、社会について学んだほか、茶道、浴衣、三味線、和食作り等を体験し、有松や郡上八幡での学外研修に参加しました。留学生からは「サマープログラムに参加したことで、日本語への興味や日本の文化への関心が益々高まりました。また梶山にきたい!」などの感想が聞かれました。



梶山の学生と会話の練習



三味線体験



有松しぼり

交換・派遣留学の新規協定校

2024年3月、モンクット王工科大学ラートクラバン校（タイ）と交換留学協定を締結しました。本学の生活科学部の海外研修でも交流のある大学で、今後建築やデザイン等の専門分野での交流が期待されます。同年5月には、ソウル女子大（韓国）と交換・派遣留学協定を締結しました。同大学は、韓国の名門の女子大学で、韓国語と英語で様々な分野で学ぶことができます。本学は、新たな協定校との連携を通じて、学生がグローバルな視野を養い、国際社会で活躍できる人材へと成長することを応援しています。



モンクット王工科大学ラートクラバン校



ソウル女子大

交換留学生の派遣

2024年度は、協定校である上海師範大学（中国）、スィーパトゥム大学（タイ）、マレーシア科学大学（マレーシア）にそれぞれ1名ずつ、合計3名の学生を交換留学に送り出しました。各大学で学んでいる学生たちは外国語や専門分野について学びを深めているものはもちろんのこと、現地の学生との交流や生活を通じて、国際的な視野を広げています。また、本学に留学経験のある学生とも現地で再会し、より充実した留学生活を送っています。



中国福利会との交流

2024年4月、黒田学長と笠原センター長、季教授が上海で女子教育に力を入れる中国福利会を訪問しました。次いで同年5月には中国福利会の代表団6名が本学を訪れ、本学園の子ども園や幼稚園を視察し、教育について意見交換しました。



留学生レポート

人間関係学部 心理学科 4年 中村 早希



2024年3月から2025年1月まで、私は中国の上海師範大学付属の語学学校で過ごしました。中国語レベルは初歩の段階で留学に行きましたが、この経験は単なる語学学習の枠を超え、異文化の中で多くのことを考え、学ぶ時間となりました。留学を決意したのは、自分の目と体で直接、現地の生活を体験したいと考えたからです。というのも、SNSやテレビの情報は偏りがちであり、多くの人々が他人の意見に影響されて判断していると感じていたからです。情報化が進み、個人が与えられる影響力が増している現代において、自分の経験から考え、判断できる人間になる意義はとても大きいと考えています。

留学生活では、文化や価値観の違いを日々感じることができました。それは時に新鮮で、時に戸惑いを伴うものでしたが、それを良い悪いで判断するのではなく、『ただ異なるだけ』と捉えられるようになったことは大きな学びでした。中国の人々は明るく、笑顔が素敵でした。親しみやすくてとても親切な彼らには留学中何度も助けられました。こうした経験を通して、異なる歴史や文化を持つ者同士が互いを理解し合うためには何が必要なのかを考えるようになりました。私は互いのことを知り、互いの主張をしつつ議論の場に立つことが何よりも大切だと思います。そのためには言語を学ぶ必要があり、言語を学ぶことは“最初に出来る歩み寄り”なのではないでしょうか。

私が好きな言葉に「複雑なものは複雑なままに理解する」というのがあります。自分の常識を基準に相手进行评估するのではなく、相手の背景や価値観をそのまま受け止める心を持ちたい、そうなるよう日々意識しています。



スタディメイト・留学生サポーターズ

スタディメイトは、交換留学生の日本語学習をサポートするほか、お互いの国の言葉や文化を教えあい、交換留学生の学修面の支えになります。留学生サポーターズは、学外研修への同行や、七夕、クリスマス会、運動会などのイベントを企画・実施し、交換留学生と交流を深めています。



3学部・学科の開設

2024年4月、本学に3つの学部・学科が誕生しました。外国語学部は、国際社会で活躍できる語学力と国際教養を身に付けることを目標としており、ジャパンスタディースも学べます。人間関係学部人間共生学科は、人間の多様性と繋がりを探求し、共生社会の構築を目指します。情報社会学部は、メディア・観光などを通じて、情報社会の中で新しい価値創造や社会課題を解決する力を養います。

この他にも、本学では多様な学びを提供しています。

編集 後記

執筆・編集にご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。第16号をお送りいたします。昨年度の国際交流センター事務室の発足に続き、本年度からは留学に力を入れる外国語学部がスタートしました。コロナ禍で落ち込んだ留学希望学生数を増やす本学の国際交流に関する体制が充実し続けています。世界の情勢が急速に変化しており、ますます多様化の時代を迎えています。留学を希望する本学学生が安全に勉学できるよう国際交流センターは活動して参ります。(国際交流センター報編集委員)

A Window Open to the World 梶山女学園大学国際交流センター報 第16号 2025.3

編集・発行 梶山女学園大学国際交流センター

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17番3号

〈TEL〉052-781-5674 (直)

〈FAX〉052-781-2038

〈URL〉<https://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/about/center/ciep/index.html>



ホームページ



Instagram